

2011/6005A-B

平成 21 - 23 年度  
厚生労働科学研究費補助金  
認知症対策総合研究事業  
による 研究報告書

認知症の本人の自己対処および生活支援に関する研究

平成 21 年度 - 平成 23 年度総合研究報告書

平成 23 年度総括報告書

研究代表者 永田 久美子

平成 24 年 (2012 年) 3 月

# 目 次

I. 平成 21 年度—平成 23 年度 総合研究報告書.....	1
「認知症の本人の自己対処および生活支援に関する研究」総合研究報告書.....	2
A. 研究目的.....	3
B. 研究方法.....	3
C. 研究結果.....	6
D. 考察.....	8
E. 結論.....	9
II. 平成 21 年度—平成 23 年度 研究成果の刊行に関する一覧表.....	13
III. 平成 23 年度総括報告書.....	17
「認知症の本人の自己対処および生活支援に関する研究」総括研究報告書.....	18
A. 研究目的.....	19
B. 研究方法.....	19
C. 研究結果.....	20
D. 考察.....	56
E. 結論.....	56
IV. 平成 23 年度 研究成果の刊行に関する一覧表.....	59

### Ⅲ. 平成 23 年度総括研究報告書

平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金認知症対策総合研究事業  
「認知症の本人の自己対処および生活支援に関する研究」総括研究報告書

研究者代表者 永田 久美子 認知症介護研究・研修東京センター

研究要旨

目的：認知症の本人が自身の生活上の課題に自己対処しながら安定や生活を拡充していくために、「自己対処支援ツール」として昨年度試作した「認知症の本人の生活課題リスト」、「認知症の本人による自己対処ガイド」、「認知症の本人の自己対処支援ガイド」の試行と検証を行う。

方法：アルツハイマー型認知症の本人 50 人（FAST stage：軽度 20、中等度 20、高度 10、居所：自宅 14、グループホーム 24、特養ホーム 12）とその家族・支援者 50 組を対象に、3 か月間のツール試行調査を実施。試行前、試行後 1 か月、3 か月、試行終了時に、参与観察調査、聴き取り調査、質問紙調査を実施した。

結果・考察：ツールの利用を通じ、認知症の重症度、居所に関わらず、本人が自分の不安や不自由、有する力や生活上の希望を確認しながら、自己課題と自己対処策を見出すことが確認された。本人の自己対処を家族・支援者が 1～3 か月支援することで、8 割のケースで本人ができることの増加、行動・心理症状の減少、生活範囲の拡大、意欲の向上、処方薬の減少等の本人のプラスの変化、家族・支援者の本人理解の向上、不安の軽減、介護継続意欲の向上等のプラスの変化が確認され、本人・家族・支援者の変化の良循環も確認された。うち 6 割は調査終了後もツールを自主的に利用する持続効果が確認された。良循環や継続的な利用が生じなかったケースは、接触頻度、本人の言葉やサインの把握数、本人生活背景情報の量が少ない特徴がみられた。発症後より早期からのツールの活用を求める意見が 9 割を占めた。

結論：「認知症の本人の生活課題リスト」、「認知症の本人による自己対処ガイド」、「認知症の本人の自己対処支援ガイド」からなる「自己対処支援ツール」が、認知症本人の生活課題と自己対処法の明確化、本人の心身や生活上の多面的なプラスの変化、家族・支援者の本人理解の向上、不安・負担の軽減、介護継続意欲の向上等のプラスの変化、本人・家族・支援者間のプラスの良循環をもたらす効果があることが確認された。ケア関係者の教育や本人・家族への情報提供のしくみに自己対処の考え方や支援方法の導入の必要性が示唆された。

研究分担者 遠藤 英俊（独立行政法人国立長寿医療研究センター）  
三浦 研（大阪市立大学大学院生活科学研究科）

## A. 研究目的

認知症の本人が自身の生活上の課題に自己対処しながら安定や生活を拡充していくために、「自己対処支援ツール」として昨年度試作した「認知症の本人の生活課題リスト」、「認知症の本人による自己対処ガイド」、「認知症の本人の自己対処支援ガイド」の試行と検証を行う。

## B. 研究方法

(1) 調査対象：アルツハイマー型認知症の診断を受けている本人 50 人（FAST stage：軽度 20 人、中等度 20 人、高度 10 人）、およびその家族ならびに支援者 50 組。

(2) 調査方法

①試行前ベースライン調査、②試行後 1 か月調査、③試行後 3 か月調査、④試行終了時調査を実施。50 組の本人、家族、支援者に下記項目を調査する。

ア. 本人調査（半構造的調査項目を用いた参与観察調査、ヒアリング調査）：

臨床認知症基準（CDR）、自立度、活動範囲、行動・心理症状の頻度、日内状態変動、服薬の種類・量、本人からみた生活課題、自己対処の内容、自己効力感等

イ. 家族調査（半構造的調査項目を用いたアンケート調査、ヒアリング調査）：本人への支援内容、支援に関する困難感、負担感、支援継続意識、医療・介護サービスの活用状況・頻度・内容、本人の生活課題と自己対処に関する理解度と理解内容、本人支援に関しての相談・協働等

ウ. 支援者調査（半構造的調査項目を用いたアンケート調査、ヒアリング調査）：イに加えて、家族への支援内容、アセスメント・ケアプランの内容、ケース検討の内容等

④終了時点調査：ツール試案の利活用頻度と利活用場面、内容のわかりやすさ、利便性、利活用してみたの気づき、利活用の今後の継続性についての意識

(3) 調査結果の分析方法

ー 1. シングルケーススタディー（質的分析）：50 組の本人・家族・支援者それぞれについて、①ベースライン調査と②試行 1 ヶ月時点、③試行 3 カ月時点（前期開始 2 カ月時点）調査の各データをもとにした経過個票および状態経過図を作成し、ツールの利活用による本人・家族・支援者それぞれの変化を把握するとともに、3 者の変化のダイナミズムの分析を行う。各ケースの分析を積み上げ、ツール活用による変化と内容の集約を行う。

対象ケースの属性（認知症の重症度、居所、本人と家族との続柄、支援者の職種）別の解析もあわせて行う。

### 倫理的配慮

本研究の調査協力者には、口頭と書面で、研究目的ならびに倫理的配慮に関する説明を十分に行い、納得と合意を確認しながら研究を進めた。

本研究は、主研究者の所属施設における倫理審査委員会の承認を得て進めた。

## C. 研究結果

### 1) 試行調査対象者の基本属性

調査対象者全ケース（50）の本人の基本属性は、下記の通りである。

- (1) 性別：男性 20 人（40.0%）、女性 30 人（60.0%）。
- (2) 年代：60 歳代 4 人（8.0%）、70 歳代 15 人（30.0%）、80 歳代 24 人（48.0%）、90 歳代 7 人（14.0%）。
- (3) 居所：自宅 14 人（28.0%）、認知症対応型共同生活介護【以下、グループホームとする】28 人（48.0%）、介護老人福祉施設【以下、施設とする】12 人（24.0%）。
- (4) 主な家族の続柄（本人の居所の如何に関わらず、本人を主となって支えている家族であり、今回の調査協力者）：夫 9 人（18.0%）、妻 10 人（20.0%）、息子 12 人（24.0%）、娘 7 人（14.0%）、息子の妻 8 人（16.0%）、その他（弟、妹、姪）4 人（8.0%）。
- (5) 主な支援者（本人を主となって支えているケア担当者であり、今回の調査協力者）：地域包括支援センター職員 4 人（8.0%）、（居宅）ケアマネジャー 5 人（10.0%）、デイサービス職員 5 名（10.0%）、グループホーム職員 24 人 48.0%）、施設職員 12 名（24.0%）。

本人の居所別の属性の分布は、図表 1 の通りである。

図表 1 ケースの基本属性：本人の居所別

属性		総数N=50		在宅N=14		グループホームN=24		施設N=12	
性別	男性	20	40.0%	6	42.9%	8	33.3%	6	50.0%
	女性	30	60.0%	8	57.1%	16	66.7%	6	50.0%
年代	60歳代	4	8.0%	3	21.4%	1	4.2%	0	0.0%
	70歳代	15	30.0%	5	35.7%	7	29.2%	3	25.0%
	80歳代	24	48.0%	6	42.9%	12	50.0%	6	50.0%
	90歳代	7	14.0%	0	0.0%	4	16.7%	3	25.0%
主な家族の続柄	夫	9	18.0%	4	28.6%	3	12.5%	2	16.7%
	妻	10	20.0%	3	21.4%	4	16.7%	3	25.0%
	息子	12	24.0%	2	14.3%	7	29.2%	3	25.0%
	娘	7	14.0%	2	14.3%	4	16.7%	1	8.3%
	息子の妻	8	16.0%	2	14.3%	4	16.7%	2	16.7%
	弟	1	2.0%	1	7.1%	0	0.0%	0	0.0%
	妹	2	4.0%	0	0.0%	1	4.2%	1	8.3%
	姪	1	2.0%	0	0.0%	1	4.2%	0	0.0%
主な支援者	地域包括	4	8.0%	4	28.6%	0	0.0%	0	0.0%
	ケアマネジャー	5	10.0%	5	35.7%	0	0.0%	0	0.0%
	デイサービス職員	5	10.0%	5	35.7%	0	0.0%	0	0.0%
	グループホーム職員	24	48.0%	0	0.0%	24	100.0%	0	0.0%
	施設職員	12	24.0%	0	0.0%	0	0.0%	12	100.0%

## 2) 試行前ベースライン調査結果

### (1) 本人の状態

ツール試行開始直前段階の本人（アルツハイマー型認知症）の状態は、下記の通りである。

#### ① 本人の心身状態

##### - 1. 認知機能の低下

Functional Assessment Staging (FAST) は、3（軽度）が20人（40.0%）、4（中等度）が20人（40.0%）、（やや）高度が9人（18.0%）。

##### - 2. 行動・心理症状

対象者の全員に何らかの行動・心理症状がみられ、Neuro Psychiatric Inventory (NPI) の合計得点は、平均値は、61.4（最低値24、最高値90）。

行動領域別の平均値（最低値、最高値）は下記の通りである。

A. 妄想 1.1 (0, 12)、B. 幻覚 0.6 (0, 6)、C. 激高・攻撃性 7.6 (0, 12)、D. 抑うつ症状 9.5 (0, 12)、E. 不安 10.0 (3, 12)、F. 多幸・気分高揚 1.9 (0, 12)、G. 無関心・アパシー 9.5 (2, 12)、H. 脱抑制 6.7 (0, 12)、I. 易刺激性・不安定性 10.5 (6, 12)、J. 異常な運動行動（歩き回る等）4.0 (0, 12)

##### - 3. 認知症高齢者の日常生活自立度

Ⅱa が7人（14.0%）、Ⅱb が10人（20.0%）、Ⅲa が14人（28.0%）、Ⅲb が11人（22.0%）、Ⅳが8人（16.0%）。

##### - 4. 障害老人の日常生活自立度

J1 が2人（4.0%）、J2 が6人（12.0%）、A1 が6人（12.0%）、A2 が17人（34.0%）、B1 が4人（8.0%）、B2 が15人（30.0%）。

##### - 5. 要介護度

要支援2が1人（2.0%）、要介護1が9人（18.0%）、要介護2が14人（28.0%）、要介護3が10人（20.0%）、要介護4が13人（26.0%）、要介護5が3人（6.0%）。

本人の居所別の心身状態は、図表1の通りである。

今回の調査対象者の認知機能の低下、自立度、要介護度は、自宅、グループホーム、施設ともに、軽度から高度まで分布している。自宅、グループホームの調査対象者とくらべ施設の調査対象者におけるNPI(行動・心理症状)値が高い傾向がみられた。

図表2 試行調査前時点の本人の状態像：本人の居所別

属性		総数 N=50		在宅N=14		グループホーム N=24		施設 N=12	
FAST stage (認知機能低下)	3:軽度	20	40.0%	6	42.9%	9	37.5%	5	41.7%
	4:中等度	21	42.0%	5	35.7%	11	45.8%	5	41.7%
	5:やや高度	8	16.0%	3	21.4%	3	12.5%	2	16.7%
	6:高度	1	2.0%	0	0.0%	1	4.2%	0	0.0%
NPI (平均値)	合計得点	61.4		60.1		57.3		71.2	
	A妄想	1.1		2.1		0.5		1.0	
	B幻覚	0.6		0.4		0.8		0.5	
	C激高	7.6		6.6		7.3		9.4	
	D抑うつ	9.5		9.4		9.4		9.8	
	E不安	10.0		10.9		9.3		10.5	
	F多幸	1.9		1.5		1.4		3.5	
	G無関心	9.5		10.6		8.8		9.8	
	H脱抑制	6.7		5.4		6.1		9.3	
	I不安定性	10.5		9.4		10.5		12.0	
認知症日常生活自立度	J歩き回る	4.0		3.9		3.4		5.5	
	I	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	II a	7	14.0%	4	28.6%	3	12.5%	0	0.0%
	II b	10	20.0%	5	35.7%	4	16.7%	1	8.3%
	III a	14	28.0%	1	7.1%	7	29.2%	6	50.0%
	III b	11	22.0%	1	7.1%	6	25.0%	4	33.3%
障害老人日常生活自立度	IV	8	16.0%	3	21.4%	4	16.7%	1	8.3%
	J1	2	4.0%	2	14.3%	0	0.0%	0	0.0%
	J2	6	12.0%	5	35.7%	1	4.2%	0	0.0%
	A1	6	12.0%	3	21.4%	2	8.3%	1	8.3%
	A2	17	34.0%	3	21.4%	10	41.7%	4	33.3%
	B1	4	8.0%	1	7.1%	0	0.0%	3	25.0%
要介護度	B2	15	30.0%	0	0.0%	11	45.8%	4	33.3%
	要支援2	1	2.0%	1	7.1%	0	0.0%	0	0.0%
	要介護1	9	18.0%	5	35.7%	4	16.7%	0	0.0%
	要介護2	14	28.0%	5	35.7%	9	37.5%	0	0.0%
	要介護3	10	20.0%	2	14.3%	5	20.8%	3	25.0%
	要介護4	13	26.0%	1	7.1%	5	20.8%	7	58.3%
要介護5	3	6.0%	0	0.0%	1	4.2%	2	16.7%	



② 日常生活の中での本人の活動の障害

本人の活動の障害を、The Clinical Dementia Rating-Japanese (CDR-J) の構成項目「地域社会活動」、「家庭生活および趣味活動」、「身の回りの活動」で把握した結果、下記の通りである。

- 1. 地域社会活動の障害

軽度が 8 人 (16.0%)、中等度が 16 人 (32.0%)、重度が 26 人 (52.0%)。

- 2. 家庭生活・趣味活動

軽度が 9 人 (18.0%)、中等度が 18 人 (36.0%)、重度が 23 人 (46.0%)。

- 3. 身の回り活動 (着衣、衛生や身だしなみ、食事、排泄)

軽度が 9 人 (18.0%)、中等度が 18 人 (36.0%)、重度が 23 人 (46.0%)。

活動の領域別・居所別に本人の活動の障害をみたのが、図表 3 である。

図表 3 試行調査前時点の日常生活の中での本人の活動の障害：本人の居所別

活動の領域	障害の程度	総数		自宅(N=14)		GH(N=24)		施設(N=12)	
		人	%	人	%	人	%	人	%
地域社会活動	0.5(軽微)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	1(軽度)	8	16.0	3	21.4	3	12.5	2	16.7
	2(中等度)	16	32.0	5	35.7	9	37.5	2	16.7
	3(重度)	26	52.0	6	42.9	12	50.0	8	66.6
家庭生活・趣味活動	0.5(軽微)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	1(軽度)	9	18.0	3	21.4	5	20.8	1	8.3
	2(中等度)	18	36.0	6	42.9	10	41.7	2	16.7
	3(重度)	23	46.0	5	35.7	9	37.5	9	75.0
身の回り活動	0.5(軽微)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	1(軽度)	9	18.0	4	28.6	2	8.3	3	25.0
	2(中等度)	18	36.0	4	28.6	12	50.0	2	16.7
	3(重度)	23	46.0	6	42.8	10	41.7	7	58.3

③ 日常生活の中での本人の生活意欲

試行調査前時点の日常生活の中で、本人が自ら生活意欲を現す頻度を5段階でみたところ、「5. ほぼ一日を通じて意欲あり」の該当者はなく、「4. 一日の中の半分以上の時間で意欲あり」が9名(18.0%)、「3. 一日の中の一部の時間で意欲あり」が15名(30.0%)、「4. 毎日ではないが、時々意欲あり(一週間に1回以上)」が13人(26.0%)、「5. ほとんど意欲なし(一週間に1回未満)」が13人(26.0%)。

居所別に本人の活動の障害をみたのが、図表3である。

図表4 試行調査前時点の日常生活の中での本人の生活意欲：本人の居所別

生活意欲	総数		自宅(N=14)		GH(N=24)		施設(N=12)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
5. 一日を通じてあり	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
4. 一日の半分以上の時間であり	9	18.0	2	14.3	7	29.2	0	0.0
3. 一日の中の一部の時間であり	15	30.0	3	21.4	9	37.4	3	25.0
2. 毎日ではないが時々あり(週1回以上)	13	26.0	3	21.4	7	29.2	3	25.0
1. ほとんどなし(週に1回未満)	13	26.0	6	42.9	1	4.2	6	50.0

(3) 主な家族の状態

① 主な家族の本人との接触頻度

「5. 日々1回以上」が9人(18.0%)、「4. 週1回以上」が5人(10.0%)、「3. 月1～数回」が18人(36.0%)、「2. 半年に1～数回」が15人(30.0%)、「1. 半年に1回未満」が3人(6.0%)であった。

居所別に積極頻度の分布は図表5の通りである。

図表5 試行調査前時点の主な家族の本人との接触頻度：本人の居所別

生活意欲	総数		自宅(N=14)		GH(N=24)		施設(N=12)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
5. 日々1回以上	9	18.0	9	64.3	0	0.0	0	0.0
4. 週1回以上	5	10.0	1	7.1	3	12.5	1	8.3
3. 月1～数回	18	36.0	4	28.6	9	37.5	5	41.7
2. 半年に1～数回	15	30.0	0	0	9	37.5	6	50
1. 半年に1回未満	3	6.0	0	0	3	12.5	0	0

②本人への関わりや介護に関する主な家族の不安

不安の程度を4段階で確認したところ、「4. 非常に強い不安あり」が32人(64.0%)、「3. 強い不安あり」が13人(26.0%)、「4. 不安はあるがそれほどでない」が3人(6.0%)、「4. (あまり)不安ない」が2人(4.0%)であった。

居所別の不安の状態は、図表6の通りである。

図表6 試行調査前時点での本人への関わりや介護に関する家族の不安(居所別)

関わりや介護に関する主な家族の不安	総数		自宅(N=14)		GH(N=24)		施設(N=12)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
4. 非常に強い不安あり	32	64.0	12	85.7	12	50.0	8	66.7
3. 強い不安あり	13	26.0	2	14.3	8	33.3	3	25.0
2. 不安はあるがそれほどでない	3	6.0	0	0.0	2	8.3	1	8.3
1. (あまり)不安ない	2	4.0	0	0.0	2	8.3	0	0.0

④ 本人への関わりや介護に関する困難感

本人の現在の状況に関わりや介護をする上での困難感を主な介護者に5段階で確認したところ、「5. 非常に強く困難を感じる」が32人(64.0%)、「4. 強く困難を感じる」が11人(22.0%)、「3. 困難を感じる」が5人(10.0%)、「4. 困難を感じるがそれほどでない」が2人(4.0%)、「5. (ほとんど)困難に感じない」と回答した家族はいなかった。

居所別の困難感は、図表7の通りである。

図表7 試行調査前時点での本人への関わりや介護に関する家族の困難感(居所別)

関わりや介護に関する家族の困難感	総数(N=50)		自宅(N=14)		GH(N=24)		施設(N=12)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
5. 非常に強く困難を感じる	32	64.0	8	57.2	15	62.5	9	75.0
4. 強く困難を感じる	11	22.0	4	28.6	5	20.8	2	16.7
3. 困難を感じる	5	10.0	1	7.1	3	12.5	1	8.3
2. 困難を感じるがそれほどでない	2	4.0	1	7.1	1	12.5	0	8.3
1. (ほとんど)困難に感じない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0

⑤ 本人への関わり・介護に関する主な介護家族の継続意識

本人への関わり・介護に関する主な介護家族の継続意識を4段階で確認したところ、「4. 関わりや介護を積極的に続けていきたい」はなし、「3. 関わりや介護を続けていきたい」が5人(10.0%)、「2. 自分ができそうな部分の介護をしていきたい」が23人(46.0%)、「1. 関わりや介護をしたくない」が、22人(44%)であった。

居所別の継続意識は、図表8の通りである。

図表8 試行調査前時点での本人への関わりや介護に関する家族の継続意識(居所別)

関わりや介護に関する家族の 継続意識	総数		自宅(N=14)		GH(N=24)		施設(N=12)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
4. 関わりや介護を積極的に続けていきたい	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
3. 関わりや介護を続けていきたい	5	10.0	3	21.4	2	8.3	0	0.0
2. 自分ができそうな部分の介護をしていき たい	23	46.0	5	35.7	13	54.2	5	41.7
1. 関わりや介護をしたくない	22	44.0	6	42.9	9	37.5	7	58.3

⑥ 本人自身にとって課題になっていることへの理解(本人理解)

本人自身にとって課題になっていることに関しての理解の程度を、介護家族に5段階で確認したところ、「5:全体的にわかる」がなし、「4:部分的にわかる」が4人(8.0%)、「3:わずかだがわかる」が8人(16.0%)、「2:わかりたいと思っ  
てはいるが、わからない」が10人(20.0%)、「1:考えたことがない」が、28人(56.0%)であった。

居所別の状況は、図表9の通りである。

図表9 試行調査前時点での本人自身にとっての課題についての家族の理解(居所別)

本人自身にとっての課題についての 家族の理解	総数(N=50)		自宅(N=14)		GH(N=24)		施設(N=12)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
5. 全体的にわかる	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
4. 部分的にわかる	4	8.0	2	14.3	2	8.3	0	0.0
3. わずかだがわかる	8	16.0	2	14.3	3	12.5	3	25.0
2. わかりたいと思っ てはいるが、わからない	10	20.0	3	21.4	5	20.8	2	16.7
1. 考えたことがない	28	56.0	7	50.0	14	58.2	7	58.3

⑦ 本人が自分なりにしている対処への家族の支援

本人が自分なりにしている対処への家族の支援を、家族に5段階で確認したところ、「5. 全体的にしている」がなし、「4.部分的にしている」がなし、「3：ごくわずかだがしている」が5人（10.0%）、「2.したいがどうしてもいかわからない」が17人（24.0%）、「1. 考えたことがない」が28人（56.0%）であった。

居所別の状況は、図表10の通りである。

図表10 試行調査前時点での本人自身にとっての課題についての家族の支援(居所別)

本人自身の課題についての 家族の支援	総数(N=50)		自宅(N=14)		GH(N=24)		施設(N=12)	
	人	%	人	%	人	%	人	%
5. 全体的にしている	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
4. 部分的にしている	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
3. ごくわずかだがしている	5	10.0	2	14.3	2	8.3	1	8.3
2. したいと思っはいるが、わからない	17	34.0	5	35.7	8	33.3	4	33.3
1. 考えたことがない	28	56.0	7	50.0	14	58.3	7	58.3

2) 自己対処支援ツールの活用状況

在宅群、GH群、施設群ともにツールの活用後、各ケースにおいて1週間～3週間内に、本人にとっての自己課題が確認された。

自己課題の数は最低1、最高5、平均3.4項目であった。

3) 自己対処支援ツール試行後に生じた変化

各ケースで把握された自己課題について3か月間、本人の自己対処支援を本人・家族・担当職員が相談・確認を行いながら進めた結果、下記のような結果が得られた。

(1) 試行後の本人の状態の変化

① 行動・心理症状

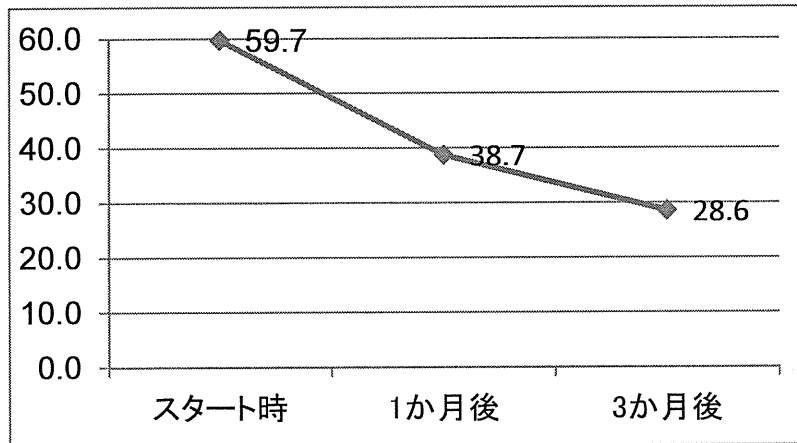
- 1 行動・心理症状の全体状況：NPI合計得点の平均値

対象者全体の試行調査前→1か月後→3か月後のNPI合計得点の平均値をみると、61.4点が61.4→47.6→36.3と低下しており、特に試行開始時から1ヶ月までの間の低下率が高い傾向が見られた。

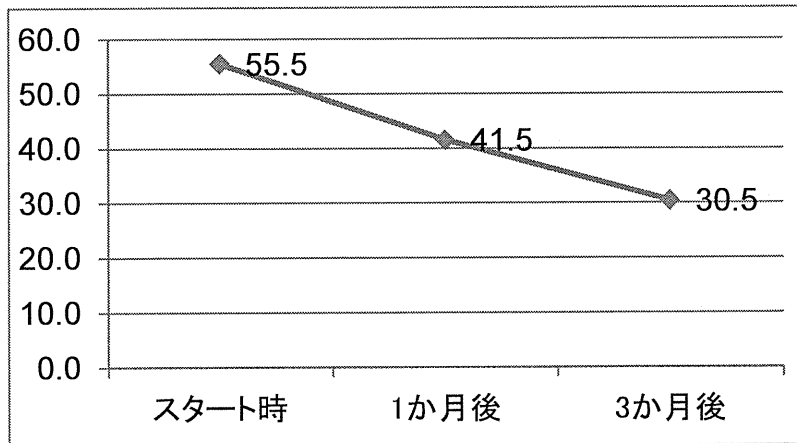
これを居所別でみると、自宅群、GH群、施設群ともに同様の傾向が見られた(図表11-1)。

各調査時点での居所別、FASTステージ別のNPI合計得点の平均値をみたのが図表11-2である。

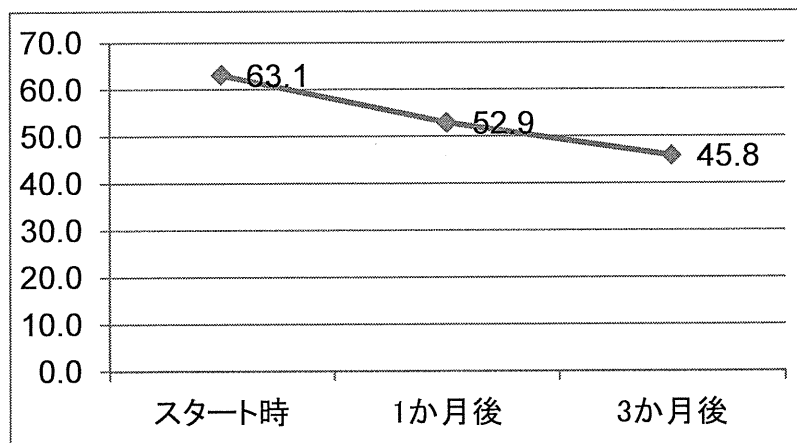
在宅 N=14



グループホーム N=24



施設 N=12



図表 1 1 - 1 居所別 PI 平均得点

図表 1 1 - 2 各調査時点での居所別、FAST ステージ別の NPI 合計得点の平均値

-1. 試行調査前時点

FAST ステージ	NPI合計得点の平均値			
	自宅	GH	施設	全数
3	51.0	52.7	67.8	56.0
4	70.6	62.1	75.0	66.8
5	61.0	54.8	71.7	61.7

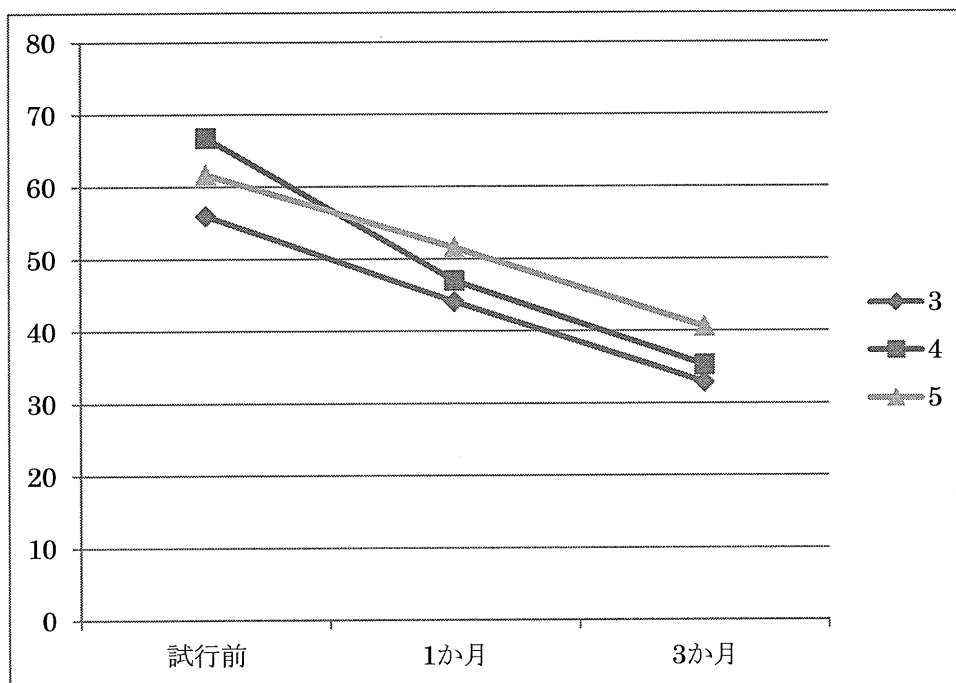
-2. 1 か月

FAST ステージ	NPI合計得点の平均値			
	自宅	GH	施設	全数
3	41.8	40.3	53.6	44.1
4	45.6	42.8	60.0	47.0
5	40.7	46.8	69.0	51.6

-3. 3 か月

FAST ステージ	NPI合計得点の平均値			
	自宅	GH	施設	全数
3	28.2	31.2	41.6	32.9
4	28.4	32.5	51.5	35.3
5	28.0	37.0	58.0	40.6

図表 1 2 は、FAST ステージ別に NPI 合計得点の平均値の推移をみたものである。いずれの FAST ステージのケースにおいても、試行前に比較して、1 か月後、3 か月の平均得点が低下しており、行動・心理症状の程度が改善されていることが確認された。



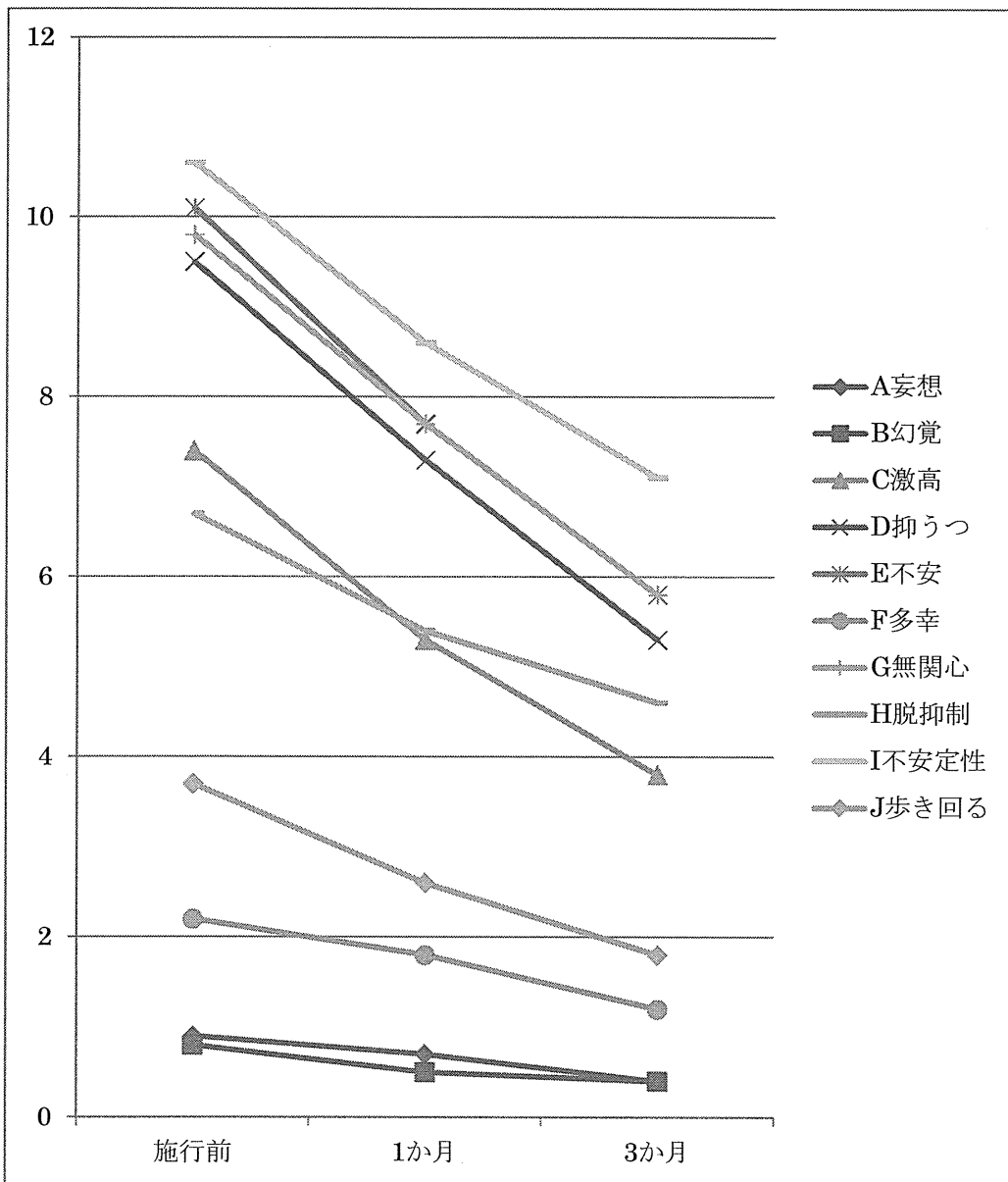
図表 1 2 FAST ステージ別の NPI 合計得点の平均値の推移

- 2 行動・心理症状の各項目 NPI 合計得点の平均値

図表 1 3 は、NPI 各項目（行動・心理症状）について、試行調査の各時点平均得点を見たものである。各項目とも、1 か月、3 か月時点と低下していることが確認された。

図表 1 4 は、NPI 各項目（行動・心理症状）について、居所別 FAST ステージ別にみたものである。各項目とも、居所別、FAST ステージ段階別にかかわらず、試行前段階にくらべて、平均得点が低下していることが確認された。





図表 1 3 NPI 各項目（行動・心理症状）の試行調査の各時点における平均得点

図表 1 4 NPI 各項目（行動・心理症状）の居所別・FAST ステージ別試行調査の各時点における平均得点

A 妄想

スタート時

	A 妄想			
FAST ステージ	自宅	GH	施設	全数
3	3.0	0.4	2.4	1.7
4	2.4	0.8	0.0	1.1
5	0.0	0.0	0.0	0.0

1 か月

	A 妄想			
FAST ステージ	自宅	GH	施設	全数
3	3.0	0.3	1.6	1.5
4	1.2	0.5	0.0	0.6
5	0.0	0.0	0.0	0.0

3 か月

	A 妄想			
FAST ステージ	自宅	GH	施設	全数
3	1.8	0.2	1.2	1.0
4	0.4	0.4	0.0	0.3
5	0.0	0.0	0.0	0.0

## B幻覚

スタート時

	B幻覚			
FAST ステージ	自宅	GH	施設	全数
3	0.0	0.0	0.0	0.0
4	0.0	1.4	0.0	0.8
5	2.0	0.8	2.0	1.5

1 か月

	B幻覚			
FAST ステージ	自宅	GH	施設	全数
3	0.0	0.0	0.0	0.0
4	0.0	0.9	0.0	0.5
5	1.3	0.5	1.3	1.0

3 か月

	B幻覚			
FAST ステージ	自宅	GH	施設	全数
3	0.0	0.0	0.0	0.0
4	0.0	0.5	0.0	0.3
5	1.3	0.5	1.3	1.0

## C激高

スタート時

FAST ステージ	C激高			
	自宅	GH	施設	全数
3	6.0	7.1	10.2	7.6
4	8.2	8.5	9.0	8.6
5	5.0	4.5	8.7	5.9

1か月

FAST ステージ	C激高			
	自宅	GH	施設	全数
3	3.8	5.1	7.4	5.3
4	5.2	6.2	6.0	5.9
5	2.7	4.3	7.7	4.8

3か月

FAST ステージ	C激高			
	自宅	GH	施設	全数
3	1.8	4.0	5.6	3.8
4	2.6	3.5	4.5	3.5
5	2.7	3.8	6.3	4.2